13

石に刻まれた心

学習した日　月　日

ゴーゴーゴー、ドカーン。

今から二百年ほど前の天明（てんめい）三年（一七八三年）六月二十八日、浅間山が大爆発をおこした。山の中から赤々と流れ出た溶岩が付近の村々を埋め尽くし、大勢の人たちが死んだ。

この幸手を流れる利根川には、溶岩とともに流されてきた土砂や木々に混じって、おびただしい数の人や馬の死骸が浮いていた。十日あまりも降り続いた火山灰が関東一円をおおい、幸手の村々でも農作物は四、五寸（十二～十五センチメートル）もの灰に埋もれ、折からの冷害による飢饉（ききん）に追い打ちをかけるようにしておこったこのできごとで、今年もまったく収穫が見込めなくなってしまった。

「なんていうことだ。おれたちがいくら汗水流して働いても、これじゃ年貢さえ納められねえ。」

「おれたちが食うものなんぞ、もうありゃしねえ。」

村人たちの顔からは、もはや生きる力も希望も消えはて、だれを恨むこともできずにただ天を見上げ、足元に降り積もった灰に涙を落とすばかりであった。

「このままでは、村人たちはどうやって生きていくのだろうか……。」

降り積もった灰を手にしながら、文左衛門（ぶんざえもん）は心をいためた。

幸手は日光街道の宿場町として栄え、街道沿いには*本陣を務める知久家（ちくけ）をはじめ、大きな構えの商家が軒を並べていた。

「東北の村などは、それはもうひどいものだ。日に日に飢えて死んでいく者が増えているそうだ。」

「なにしろ草木の根まで食い尽くしたというから恐ろしい話だ。」

旅人たちのうわさ話を思い浮かべながら、文左衛門は手にした灰をかたくにぎりしめた。

灰が降り積もった大地からは、その年の秋になっても作物の収穫はなかった。ひもじい思いで年を越し、春を迎えた村人たちは、いよいよ食べるものがなくなり飢えに苦しんだ。

ある日、文左衛門は、豪商の*長島屋から相談を持ちかけられた。

「このままでは、村のものが飢えて死んでしまう。なんとかできないものだろうか。文左衛門さん。」
「こう天災や飢饉が続いては、どうにもなるものではなかろう。なにしろ飢えているのは一人や二人ではないのだからね。それに、この飢饉もいつまで続くかわからない。」
「それはそうだが……。」
浮かぬ顔の長島屋を見送りながら、なんとなくわりきれない気持ちの文左衛門は、
（どうしたらよいのだろう。この飢饉が早く過ぎ去ることを祈るしかないのだろうか。）
そう自分に問いかけていた。
日に日に飢えて死んでいく村人のうわさが、あちこちで聞かれるようになった。食べ物を求めて、ふらふらと町の近くまで現れるやせ細った村人の姿も見られるようになった。
そんなある日、文左衛門は、用事があって町はずれまで出かけた。裏町にある寺の横を通り過ぎようとした文左衛門は、境内の人だかりに気づき、足を止めた。ふと見ると、お堂の方では住職が、ありがたそうに手をさし出す村人たちに小さなイモのかけらを一人ずつ手わたしていた。
（あんなものでも腹の足しになるのだろうか。）
そう思いながらも、文左衛門はしばらくの間、その様子をじっとながめていた。が、住職がちらっとこちらを見たような気がし、急いでその場を通りすぎた。
用を済ませた帰り道、先ほどの寺の近くにさしかかると、大きな銀杏（いちょう）の木の根元に何やらうずくまった人影らしきものが見えた。だんだん近づいていくと、破れた着物からやせおとろえた手足を出した男が頭を垂れて銀杏の木にもたれかかり、うずくまっているのだった。
（何とかわいそうに、こんなところで死んでいるとは。）
文左衛門は、目を伏せて早足でそこを通り過ぎようとした。その瞬間、ぞうりの鼻緒がぷつっと切れた。文左衛門が途方にくれていると、死んでいると思った男がぬくっと起きだして、こちらにふらふら近づいていくる。恐ろしさのあまり、文左衛門のからだは凍りついたように動けなかった。
どれくらい時間がたったのであろう。文左衛門が気がつくと、足元にすげかえたぞうりがあり、よろよろと歩く男の後ろ姿が遠くに小さく見えた。
二、三日眠れぬ日が続いた。箸を口に運びながらも食事がのどを通らなかった。

文左衛門の足は、長島屋に向かっていた。

「長島屋さん、このあいだの話だが……。」

「いったい急にどうしたっていうんだい。」

「この幸手は宿場町として潤っている。どうだろう、町の商人たちと相談してみては。」

「不作続きで米の値段もこんなに上がっていては生活も苦しくなり、うまくいくかどうか。なにしろたび重なる飢饉で苦しんでいるのは、農民ばかりではないのだからね。」

「だが、こうしているうちにも……。どこまでできるかわからないが、長島屋さん、一緒にやってくれるかい。」

しばらく考えていた長島屋は、にっこりうなずいた。

その翌日、すぐにおもだった町の商人たちを呼び集め、相談を始めた。文左衛門の熱意と真剣なまなざしがみなの心を動かした。お金や穀物を持ち寄って、寺の境内に粥所を設け、大きな釜でつくった粥を、飢えに苦しんでいる人に分け与えることにした。

境内には、その日食べるものもない人たちが後から後から何百人も集まってきた。やせ細ったからだを支え合うかのようにして歩いてくる者、やっとの思いで境内までたどりつき、力尽きて倒れこむ者、みなありがたそうに粥をすすった。文左衛門は、粥の入ったおわんを一人ずつに手わたしては、おいしそうに粥をすする人たちの顔をながめながらほほえんだ。

この救済は、*何百両というお金を使って麦が実る夏までの、実に七十日もの間続けられ、多くの人たちの命を救った。

幸手市の正福寺の境内にある「義賑窮餓之碑」には、文左衛門のほか、救済にあたった二十一人の名が刻まれている。（「埼玉県道徳教育用郷土資料集（中学校）」から）

＊本陣…宿場で大名が泊まった公認の旅館のこと。
＊長島屋…幸手宿にあった日光街道随一の呉服商。
＊両…当時の通貨単位。江戸時代中期頃で一両が四～六万円程度。

義賑窮餓之碑（正福寺）

● 知久文左衛門の生き方について、感じたことや考えたことを書いてみよう。